The Japan Lung Cancer Society

用いることで，腫瘍内浸潤B細胞より腫瘍特異的ヒト型IgG抗体が産生されることを確認した．さらに，自己肺癌の系において腫瘍内浸潤B細胞より産生されたIgG抗体の認識する腫瘍抗原をSEREX法に応用することで同定した．肺癌腫瘍局所での液性免疫応答に関与した腫瘍抗原を解析することにより，腫瘍拒絶につながる抗体療法の有効なターゲットが選定可能になると考えられる．

16. 肺大細胞癌切除例の検討

大分県立病院胸部外科
佐野　功，内山貴堯，山岡憲夫
山崎直哉

当科で切除した肺大細胞癌54例に対して，その臨床病理学的検討を加えた．年齢は32～81歳，平均64.5歳で，性別は男性46例，女性8例であり，喫煙者が31名76%と多かった．発生部位は中枢型8例，末梢型46例で，29例54%は有症状であった．病期はI期14例，II期13例，III期23例，IV期4例で，5年生存率は全体で42%であり，腺癌52%，扁平上皮癌54%に比べ有意に不良であった．病期別ではI期では91%と極めて良好だが，II期9%，III期35%でありII期以上では不良であった．また，n因子ではn(－)23例で66%，n(＋)31例は25%となり，脈管内侵襲ではv(－)27例は5生率61%，v(＋)26例25%，ly(－)18例53%，ly(＋)35例36%であった．大細胞癌は男性で喫煙者に多く，I期の予後は期待できるが，II期以上および脈管内侵襲陽性例は予後不良である．

17. 大量壊死を伴い原発巣内にサルコイド反応が認められた肺大細胞癌の1例

球磨郡公立多良木病院呼吸器科
柏原光介，糸永浩太郎

症例は49歳女性．胸部X線およびCTでは右S^6領域に空洞を有する直径18 mmの腫瘤陰影が認められた．経皮的肺吸引細胞診では壊死と類上皮細胞集団が認められ肺結核腫と診断された．半年間の抗結核剤治療が行われたが腫瘤の増大が観察されたためVATS-LBが施行された．病理学的には腫瘤全体を壊死が占拠する肺大細胞癌(p-T1N0M0)の所見であり原発巣内に巨細胞を伴う非乾酪性類上皮細胞肉芽腫が散見された．所属リンパ節におけるサルコイド反応の頻度は原発性肺癌では3.2%と報告されているが，原発巣内でのサルコイド反応は稀であり大半の症例は肺腺癌である．本症例は大細胞癌の原発巣内に壊死とサルコイド反応に由来する類上皮細胞肉芽腫が共存しており経皮的肺吸引細胞診にて当初肺結核腫と診断され興味ある1例と思われる．

18. 化学療法により皮膚筋炎の症状が改善したLarge cell carcinomaの1例

大分医科大学第2内科
後藤加奈子，平田範夫，玄同淑子
三戸克彦，水之江俊治，時松一成
永井寛之，門田淳一，那須　勝
同　検査部病理　加島健司

肺癌化学療法の奏効に伴い，皮膚病変も改善した1例を経験したので報告する．症例は60歳，男性．主訴は咳嗽，労作時呼吸困難，皮疹．平成13年3月より咳嗽と皮疹出現，近医にて胸部異常影も指摘され，労作時呼吸困難も出現のため，平成14年3月7日当科紹介入院となった．理学所見，及び生検により皮膚筋炎と診断した．また，右上肺野に2個の腫瘤影と縦隔リンパ節腫大を認め，肝にも多発結節を認め，左鎖骨上窩リンパ節生検により，large cell carcinomaと診断した．皮膚筋炎はステロイド抵抗性であったがCBDCA＋PTXにより肺癌と共に皮膚筋炎の症状も軽快した．

19. Basaloid carcinomaの1切除例

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科腫瘍外科
井上征雄，岡　忠之，赤嶺晋治
田川　努，村岡昌司，永安　武
綾部公懿
同　医学部附属病院病理部　林徳眞吉

basaloid carcinomaはまれでlarge cell carcinomaの亜型に分類され，予後不良とされている．basaloid carcinomaの1切除例について文献的考察を含め報告する．症例は62歳女性．平成13年2月胸部異常陰影を指摘され，近医受診．胸部CTにて左S^5に3 cm大の腫瘤と縦隔リンパ腫大を認めた．TBLBにて左B^5よりcarcinomaと診断され，4/16当科紹介．5/1胸腔鏡補助下に，左舌区区域切除施行．病理診断はpT1N0M0，Stage IAで，分化を示さない小型細胞の蜂巣状増殖からなるbasaloid carcinomaであった．術後合併症なく生存中である．

20. 当センターにおける気管支原発カルチノイドと胸腺原発カルチノイドの検討

熊本地域医療センター内科
竹田佳代
同　呼吸器科　瀬戸貴司，千場　博
同　病理　蔵野良一

1986年から2002年までの期間に当センターにおいて気管支原発カルチノイド9例，胸腺カルチノイド3例を経験した．気管支カルチノイド9例の初診時平均年齢は53.3歳，男女比は5：4であった．胸腺カルチノイド3例は初診時平均年齢が59.3歳，男女比は1：2であった．気管支カルチノイドは初診時全例がstage IA期で切除が施行され，現在までに再発した症例は認められていない．胸腺カルチノイドは初診時より1例が肺への直接浸潤を，2例が骨への遠隔転移を来たし，局所進展型の1例は切除後4年8ヶ月で局所再発を来たした．胸腔内原発カルチノイド12例についてその進展様式と臨床経過について比較検討し報告する．

21. 胸腺カルチノイドの2切除例

佐世保市立総合病院外科
徳永隆幸，橋爪　聡，近藤正道
原　信介，南　寛行

症例1：68歳女性．平成8年2月，胸部レントゲンで縦隔腫瘍を指摘され，増大傾向あり，平成9年8月外科紹介，9月11日胸腺摘出，右肺上葉部分切除，心膜合併切除術を施行．病理検査でatypical carcinoid tumor，悪性の診断にて縦隔へ40 Gyの放射線照射した．経過中，平成12年3月に胸部

NII-Electronic Library Service